



## ジャクソンのシネマハウスで会いましょう！

前橋市国際交流員 ジャクソン・バニスターの活動報告

令和8年10月

前橋市のミニシアター「前橋シネマハウス」。映画好きの国際交流員ジャクソンが、支配人おすすめの一本を観て、レビューをお届けします。映画は国境を超える！  
皆さん、映画館でお会いしましょう！



10月の映画

『大統領のケーキ』

2025年 イラク/カタル/アメリカ

Jackson Bannister

群馬県前橋市の国際交流員(CIR)として、日本人と外国人との文化的理解を深めるために活動しています。



映画はもう一人の家族

～前橋の街で新たな映画の発見を。地域とつながりを持った映画館を目指します～



映画を通じて家族のようなつながりを地域の皆さんと作っていききたいという思いから“前橋シネマハウス”をオープンすることになりました。小さな映画館ではありますが、前橋の街なかから様々な映画を発信しています。上映が少ないミニシアター系の良作からシネコンで上映が終了したヒット作、お子様と一緒にファミリーで楽しめる作品、過去の名画など様々なジャンルから作品をセレクトし新しい映画を発見してもらえる。そんな“シネマハウス”をつくっていききたいと思います。

MISSION ————— 前橋千代田町五丁目1-16前橋プラザ元気21別館3階

# 大統領の THE PRESIDENT'S CAKE ケーキ

---

一人の少女のケーキ探しから  
見える、戦争と独裁の現実。

今回の映画レビューでは、現在前橋シネマハウスで  
上映中の『大統領のケーキ』を紹介します！

1991年の湾岸戦争について、私はアメリカ人として  
これまで数多くの映画や作品を見てきた。しかし、  
そのほとんどはアメリカ側の視点から描かれたもの  
だ。戦争そのものを批判的に捉えたり、アメリカ軍  
の参戦目的に疑問を投げかけたりする作品でさえ、  
その戦争によって直接的に人生を大きく変えられた  
人々、つまりイラクの一般市民に目を向けることは  
ほとんどない。

---

そんな中で描かれるのが、2025年のカンヌ国際映画祭でカメラ・ドールを受賞した、イラク出身の新鋭監督ハサン・ハディクによる長編デビュー作『大統領のケーキ』だ。本作は、9歳の少女ラミアが、クラスメートの中からくじ引きで選ばれ、「大統領」ことサダム・フセインの誕生日を祝うケーキを作るため、その材料を探し回る姿を描いた作品である。しかも、ケーキを完成させられなければ命を落としかねないという重い責任を背負っている。物語の舞台となるのは、国連による厳しい制裁下に置かれ、食料や医薬品、その他の日用品が深刻に不足し、物価も高騰していた時代のイラクだ。材料を集めるため奔走するラミアは、長年にわたる戦争や経済的困窮、社会の疲弊によってほとんど崩壊しかけた社会の中を、自らの知恵を頼りに切り抜けていかなければならない。

ハディク監督は、アメリカによる侵攻以前から、イラクの一般市民の生活が多年の戦争、独裁的な統治、経済的な衰退によってすでに大きな影響を受けていたことを明確に描き出している。サダム政権の支配がいかに社会に浸透していたかを、監督はわざわざ説明する必要すらない。

サダムの肖像画が、ほぼすべての場面でただそこに存在しているからだ。また、イスラム教が多数派を占める国でありながら、この時代にはサダム・フセインがイラク人の生活の中で、ほとんどどこにでも存在する人物となっていたことも描かれている。さらにハディク監督は、サダムに対する個人崇拜と宗教的な崇敬との間に興味深い類似性を持たせている。作中では、サダムの名前が口にされた際に祝福の言葉が添えられることがあり、これはイスラム教徒が預言者ムハンマドの名に続けて祝福の言葉を唱える慣習を思わせる。

映像面では、『大統領のケーキ』にはどこか古い映画のような趣がある。ハディク監督はワイドスクリーンで撮影し、画面の端にビネットを加えることで、作品に独特のノスタルジーを与えている。それが、時代を超越したように感じられる物語の舞台ともよく調和している。特に印象的なのが、ラミアの故郷である歴史的なイラクの湿地帯を舞台とした場面だ。撮影監督のチューダー・ヴラディミール・パンドウルは、水路から豊かな植物まで、イラクの田園風景の美しさを見事に捉えており、その映像によって、

これらの場面はほとんど理想郷のようにさえ感じられる。しかし、その美しい風景にはどこか悲しさも漂っている。1991年の湾岸戦争後、この湿地帯は地域住民に対するサダム・フセイン政権の弾圧の一環として、大規模な排水と破壊の被害を受けることになるからだ。この美景がその後どうなるのかを知った上で見ると、これらの場面にはほろ苦い美しさが生まれ、パンドゥルの撮影はより一層印象深いものとなっている。

しかし、この作品について最も強調したいのは演技だ。主人公ラミアを演じる子役のバニン・アフマド・ナイエフは、登場するすべての場面で本当に素晴らしい演技を見せている。これが彼女にとって俳優としてのデビュー作だということを考えると、単に台本の台詞を覚えて話している子どもを見ている、という感覚をほとんど抱かなかったことには驚かされた。過酷な環境で育ったことによる繊細な感情や強さを持ちながらも、9歳の子どものらしい無邪気さを失っていない。その他のキャストも、それぞれの役を見事に演じている。特に、そのほとんどが演技未経験者だったことを考えると、その演技力には感心させられる。

一方で、この作品について気になった点の一つが、歴史的な時系列だ。作中の時代設定は明確に1990年となっているものの、いくつかの描写や出来事については、1991年の湾岸戦争中、あるいは戦後のイラクの状況により近いように感じられた。また、一部の登場人物の登場のさせ方がやや繰り返しに感じられる場面があり、感情的な場面についても、作品が意図していたと思われるほど強く心に響かなかった部分があった。

総じて、いくつかの展開が個人的には物足りなく感じられたことや、歴史的な時系列について気になる点があったことを差し引いても、『大統領のケーキ』は非常に美しく撮影・演出された作品であり、独裁政治や戦争、経済的困窮が、普通の人々の社会的なつながりを徐々に蝕んでいく様子を見事に描いている。何より本作は、私がアメリカ映画でほとんど目にすることのない湾岸戦争の物語を描いている。そこにあるのは、戦争を戦った兵士たちの物語ではなく、ただその戦争を生き抜かなければならなかった一般市民の物語なのだ。